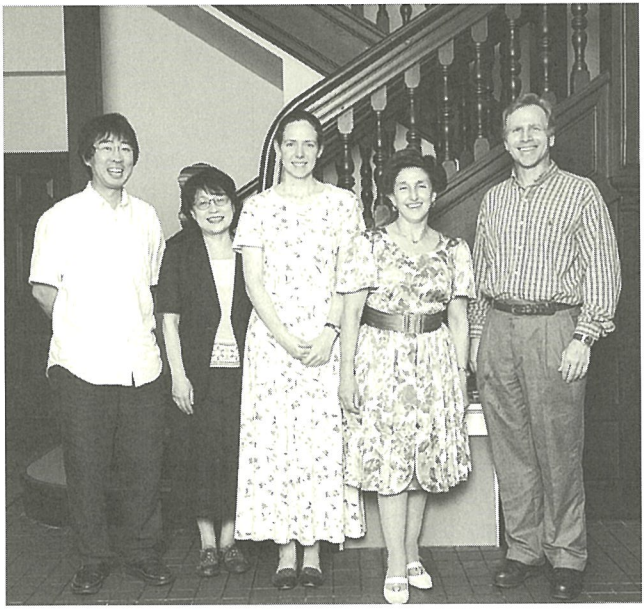
座談会

# 同志社で教えて
## ―外国人教員からみた日本の教育



出席者 **松下マルタ**（大学言語文化教育研究センター教授）
**小川　サラ**（国際中学校・高等学校教諭）
**Dan ROSEN**（大学法学部教授）
**朱　　捷**（女子大学現代社会学部教授）
司　会 **馬場孚瑳江**（大学言語文化教育研究センター教授）
〈敬称略・ＡＢＣ順〉

### 日本とのそれぞれの出会い

**馬場**　本日は、外国人教員から見た日本や日本の学生、特に同志社の生徒・学生について語り合ってみたいと存じます。併せて、同志社の異文化交流や外国語教育の特徴、問題点も取り上げていきたいと考えています。

現在、同志社の外国人専任教員数は、高等学校で一人、国際中学校・高等学校で三人、女子大学は十一人。女子大学では、教員の数が留学生より多いと伺っています。大学には、十八人おりますので、全体では三十三人の外国人教員が教育に携わっていることになります。私が所属している言語文化教育研究センターでは、一九九三年の開設以来、同志社で設置されている英語からハングルまで七つ

の外国語に、少なくとも一人のネイティブスタッフが揃い、多彩なプログラムを提供しています。

それでは、まず皆様ご自身のバックグラウンドを含めて同志社の教員になるまでの経緯を伺い、そこから議論を深めていきたいと思います。

**朱**　私は、中国の上海市の出身です。ご存知のように中国は、一九七二年までは外国の情報というものはまったく入ってきませんでした。アメリカのキッシンジャー大統領補佐官が中国を訪れたのが、一九七一年七月で、ニクソン大統領の訪中が実現したのが一九七二年二月のことでした。同年には、日中国交回復が実現し、それ以降、外国の情報が徐々に入ってくるようになりました。そんな歴史の流れの中で、私は高校生の時に日本語と出会いました。

今でも覚えていますが、一九七三年三月五日は、上海ではじめてラジオ放送の日本語講座がはじまった日です。とても興味を持って本屋に本を買いにいってみると長蛇の列ができていました。何とか本を手に入れ友達五、六人で勉強を始めたのです。勉強会は、最後には二人だけになりましたが、私は一九七五年に上海の大学に入り日本語、日本文学を勉強しました。でも留学は夢にも思いませんでした。一九七八年四月に留学生派遣の試験があると聞いたときは、うそだと思ったぐらいでした。一九七九年の来日当時は、日本全国に百人しか中国人留学生がいなかった。それが今や数万人です。当時私たちが、市役所に外国人登録にいくととても珍しがられて、助役さんが出てきてお茶を入れてくれた。今では、冷たくされます(笑)。大阪で四年間、そして京都大学で中国語・中国文学を専攻して学び、その後名古屋の大学に就職し、三年前から同志社で教えています。

**馬場**　朱先生が入学された頃、中国の大学には日本文学や日本文化を学ぶ学科や講座はあったのでしょうか。

**朱**　ほとんどなかったですね。一九七〇年代初めまでは上海ではわずか一つの大学に日本語学科があっただけだと思います。私が大学に入った頃に随分新設されましたが。私の日本語の先生は、語学専門の先生ではなく、高校生の時まで、日本に住んでいた人でした。中国語より日本語の方が上手でしたから、授業はほとんど日本語でした。日本語を覚えるには、結果的にその方が良かった。日本の新聞、本や雑誌は少なくてほとんど読めなかったし、テキストも限られていましたから。

**松下**　私はアルゼンチンで生まれ育ちました。アルゼンチンは、十九世紀半ば以降、ヨーロッパからの移民が大量に入り込んできて、現在人口は約三千三百万人。そのうち約九二%が、ヨーロッパ系の人々です。そんな国際的な環境だったので、公用語はスペイン語ですが、実際には多様な言語が使われていました。その中でスペイン語とポルトガル語は似ていて、勉強しなくても七割くらい分かるので、二つの言語で話していても話は通じます(笑)。私の父はスペイン人、母はフランス系で、母からフランス語を学びました。姉はフランス系の人と結婚しました。ほんとうに国際的な環境だったのです。大学では政治学・政治思想を勉強していて、日本人留学生と知りあったのが、日本との出会いでした。その日本人が、今の夫です。その後日本に来て、一九九

**松下マルタ氏**

マツシタ・マルタ／アルゼンチン、メンドサ生まれ。アルゼンチン国立クージョ大学政治社会学部卒業。同博士課程修了（政治学博士）。ラテンアメリカ政治思想専攻。南山大学外国学部イスパニヤ科講師、助教授、教授を経て'95年より大学言語文化教育研究センター教授。『ラテンアメリカにおける政治的ロマン主義』（スペイン語、ブエノスアイレス）、『ラテンアメリカにおける政治思潮』（スペイン語、大学書林）、『ラテンアメリカ：社会と女性』（共著、新評論）、『ラテンアメリカ：政治と社会』（共著、新評論）など。

五年に言語文化教育研究センターに職を得ました。ラテンアメリカの政治思想が専門ですが、最近は日本の思想家福澤諭吉とアルゼンチン近代化の父サルミエントの比較研究もしています。

**馬場**　松下先生は、いつ頃から日本に興味や関心を持たれるようになったのでしょう。

**松下**　大学に入った当初は、日本に来るとは思いもしないことでした。アルゼンチンと日本は、貿易関係はもちろんありますが、文化交流はほとんどありません。今でも大学で、きちんとした日本研究をしている所はとても少ないと思います。フジサン、ゲイシャ、サクラくらいしか知られていなかった。それほどアルゼンチンには、日本の情報が無かったのです。一九八二年のイギリスとのフォークランド紛争、私たちは、〝マルビナス紛争〟と呼びますが、その頃まではヨーロッパしか見ていなかった。ラテンアメリカやアジアに視点が向くようになったのは紛争以降ですね。そんな中、日本に興味を持ち始めたのは、やはり今の夫と出会ったからですね。「結婚してください」と言われた時、不安で、日本のことをいろいろ確かめたり、悩みましたが、勇気を出して結婚しました。ご覧のとおり今でも生きています（一同笑）。

結婚してからは、よく文化の違いを感じました。日本に来るまで、自分は国際的だと思っていたことは、実はヨーロッパ文化圏の国際化に過ぎなかったと気付きました。例えば時間の感覚です。ラテン系の人は、非常にのんびりして、遊ぶ時は遊びます。あまり時間を気にすることがなく、時計を置くこともあまりない。夫は、各部屋に時計を置きたがります。私は嫌ですね。パーティーをした時に、日本人はいつ頃、パーティーが終わるのかという感じで、時計を見ているんですね。大変なショックでした。そのほか、家庭生活や人間関係など違うところがたくさんあります。

**馬場**　松下先生も朱先生と同じように、母国と日本との交流の開始点にいらしたということですね。

**松下**　私は朱先生と違って、勉強したり自分で選んだことではありませんが、たまたま人生の流れで、今に至っています。ありがたいですね。これだけ違う文化に

入り込んで、今まで信じてきたことが逆さまになると、何が健康的で、何がいい、悪いということに対して、いろんな考え方があるとわかりました。私にとって大きな勉強になりました。

**ROSEN**　私は、アメリカ出身です。アメリカでラジオ局、テレビ局のニュースレポーターをしていました。しかし法律を勉強したいと思い大学に戻り、マスコミ法などを専門に勉強して、その後、ロヨーラ大学法学部教授になりました。一九八七年にフルブライト奨学金で教師として来日、神戸大学と大阪大学で一年間過ごしました。その時の同志社の友人とのつながりから、一九九三年同志社大学で客員教授として、二年間教えました。一九九七年に専任教員として戻ってきて今に至っています。

**馬場**　フルブライト奨学金で日本に行こうと思われたのは、日本に興味があったからですか。

**ROSEN**　はっきりとした形ではありませんでした。高校生になるまで、授業で日本については何も教えられませんでしたが、中学三年生の時に世界史の授業の中で中国の話は出てきました。共産主義革命とアメリカの関係がありましたから。それがはじめてのアジアの勉強でした。

日本についての最初の思い出は、ラジオで流れていた歌ですね。英語じゃないので、何を歌っているのか分からない。実は、坂本九の「上を向いて歩こう」だったのです。英語版は「SUKIYAKI」です。また、大学の時にも日本との出会いがありました。私の父はユダヤ教、母はキリスト教ですが、どちらの宗教も一〇〇%自分のものではないと感じて、比較宗教の授業を受けていました。そこで、禅仏教と出会ったのです。禅仏教の本を読んでみると、ページをめくるごとに自分の中にどんどん入り込んできて、驚きました。これだと感じましたね。しかしその時は、それだけで終わりました。大学教授になった時に、ちょうどアメリカ憲法発布二百年記念日にちなんで、世界中さまざまな国でアメリカ憲法紹介のための教員募集がありました。その時、大学時代を思い出し、禅仏教を持つ日本という国へ行ってみたいと、思い立ちました。したがって、日本語はほとんどでき

**小川サラ氏**

オガワ・サラ／1969年アメリカ、セントルイス生まれ。'91年スミスカレッジ卒業後、'92年までノースウェスタン大学大学院博士課程で学ぶ。地質学を専攻。その間、'89年から'90年、AKP（Associated Kyoto Program）で、同志社大学で学ぶ。'91年には、米国内務省の研究調査機関・米国地質研究所に籍を置く。'92年から'95年までJETプログラムで再来日、愛知県の高校で英語を教える。'98年から同志社国際中学校・高等学校へ赴任。担当科目は英語。帰国生徒部で帰国生徒の指導にもあたる。

ない状態での来日でした。

**馬場**　京都には禅寺が随分ありますね。

**ROSEN**　私の家は、大徳寺の隣にありますが、大徳寺の塔頭で、毎週二回ほど座禅を組むようにしています。悟りはまだですが（笑）。

**馬場**　小川先生は、高校生の時に日本に来られたそうですね。

**小川**　アメリカのシカゴ近郊のエバンストン出身です。いろいろな国からの移民が多い地域で、小さい頃からお箸を使って和食を食べたり、美術館でアジア系の作品を観たりしていて、ずっと日本に興味を持っていました。それで高校生の時に、YFU(Youth for Understanding)のユース留学生として日本に来ました。三カ月程名古屋で過ごしました。日本での経験は素晴らしくて、大学三年次生の時にAKP（Associated Kyoto Program）を利用して、今出川キャンパスで一年間日本語と日本文化、政治の勉強をしました。ほんとうは、そのまま日本にいたかったのですが、私の専門は地質学でしたので、一年後アメリカに戻り、アメリカの大学院に進みました。その大学院を途中で退学して日本に戻ってきました。日本が忘れられなかったのです。英語教師招致を目的としたJETプログラム（The Japan Exchange and Teaching Programme）で、公立の六校で約三年間英語教師をしました。その経験のなかで、どうしても日本の学校のホームルームの先生になりたくて。それで国際中学校・高等学校に縁があって、今に至っています。

**馬場**　今でも地質学を勉強されていますか。

**小川**　地質学は、生徒といっしょに遠足に行く時に説明するくらいですね（笑）。

## 日本・同志社で教えるということ

**馬場**　先生方が日本、特に同志社に来られてどんな経験をされ、どのような印象を持たれたのか、日本や同志社に対する意見も含めてお話しください。

**朱**　同志社女子大学に初めて来た時に驚いたのは、教授会でのお祈りですね。最後にみんなで「アーメン」と言いますが、そのタイミングが分からない。それが新鮮というか（笑）。

**Dan ROSEN 氏**

ダン・ローゼン／1952年アメリカ、シカゴ生まれ。'71年からラジオ・テレビの各局でニュースリポーターを務める傍ら、大学で学ぶ。テキサス大学で文学修士、サザンメソディストロースクールで法学博士号(J.D.)、'83年にはエール大学ロースクールで法学修士号、'86年法学博士号(J.S.D.)を取得。'84年からロヨーラ大学法学部で教鞭を執る。'87年からフルブライト講師として来日、'88年まで大阪大学や神戸大学で教える。'93年から'94年まで同志社大学法学部客員教授、'97年から同教授。'98年からNHKの国際局アドバイザーを務めるなど、各方面で活躍。

**馬場**　朱先生は、中国語のほかに比較文化、比較文学も教えておられますが、授業ではどう感じられていますか。

**朱**　京都大学での経験ですが、中国語を教えていた時、二、三人の帰国生がいました。今でもその人たちの名前を覚えていますが、普通の学生と全然違うんですね。授業中や授業後によく質問する積極的な人たちでした。また、これはスタンフォード大学で一学期教えていた時の話ですが、七人くらいのかなり専門的な授業を持っていたんです。オフィスアワーが週に二時間ありました。七人だけなので誰も来ないかもしれないと思って、本を持ち込んでいました。しかし、一回も読めたためしがない。必ず学生が来る。授業の質問や、レポートのテーマについて「このアイデアでいけますか」とアドバイスを求められたり、本や資料を紹介してほしいと相談に来る。日本の学生との違いを感じましたね。日本の学生は、一方的に授業を聞いていることが多く、できれば双方向の授業ができないかとずっと考えていたわけです。

私の経験では、今の日本の学生は、表現しようとする意欲はものすごくあると思います。ただ、チャンスがない。

同志社女子短期大学の一年生のゼミで私は、作文を書かせたことがあります。歌でも小説でもエッセイでも自由に書かせてみるといい作品が出てきた。それで合宿して、作者の名前を伏せて読み合い、最後に投票でベストスリーの作品を選ぶことをしてみました。学生達は、喜んでくれました。二年生対象の日本語日本文学演習のシラバスにそのことを書いたら、定員の三倍近くの応募があった。短大のゼミは、人数制限がありますから二十四、五人を選んでゼミをスタートさせました。現在第一線で活躍している先輩たちを取材するという私の提案に、学生たちは積極的に応じてくれました。東京まで自費で行き取材をして、レポートを書いてくれた学生もいます。学生が取材して帰ってくると、イキイキしていた。先輩から刺激を受けているんでしょうね。一年かけてこのレポートを仕上げ、『春立つきょうの風　女子大卒業生物語』（ナカニシヤ出版）という本にして出版しました。ゼミ生が、友達にその本を読ませると感動して涙を流したそうです。自

**朱　捷氏**

シュ・ショウ／1958年中国、上海生まれ。'87年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。京都大学文学博士。'91年中京女子大学助教授、'92年から'93年までスタンフォード大学客員研究員・客員助教授、'98年同志社女子大学助教授、'00年教授。比較文学・比較文化論専門。著書『神さまと日本人のあいだ』（福武書店　'91年）、『比較文明学の理論と方法』（共著、朝倉書店　'99年）、『においとひびき』（白水社、'01年9月刊行予定）。中国語や「比較文化概論」などを担当。

**馬場孚瑳江氏**

ばば・ふさえ／1944年北海道生まれ。北海道大学、同大学院修士課程修了。現在、言語文化教育研究センター教授。専攻はドイツ文学で、最近は19世紀から20世紀への転換期におけるオーストリアの女性作家の作品やその社会的背景を研究している。著書（共著）には『コミュニケーション的行為の理論』（未来社　'87年）、『ドイツ/女のエクリチュール』（勁草書房　'94年）など。

分たちの書いた文章には力があると、学生たちは感じたと思います。人の人生を聞いて、自分の言葉で人に語り聞かせる。やってみるとものすごく効果があり、卒業する時にはみんな涙を流して別れを惜しんでくれた。同志社の学生は勉強意欲があって、自分を表現する意欲がものすごくあると思いますね。

**馬場**　小川先生の目には、アメリカの生徒と比べて日本の生徒はどのように映っていますか。

**小川**　アメリカでは、生徒としての立場しか経験していないので、単純比較は難しいです。日本では同志社以外の学校に勤めたことがありますが、座って聞くだけの生徒が多かった。話してもらおうとしても意見をあまり言わないことが多かったです。国際中学校・高等学校に来て、最初は驚きました。他校で慣れていた私にとっては、積極的に授業に参加したり、よく発言する同志社の生徒は新鮮な驚きでした。こちらがこうしましょうと言うと、生徒の方から「どうしてそういうふうにするの？」と返ってくる。その方がいいですね。自分で考え疑問があれば、はっきり聞いてくれたほうがいい。国際中学校・高等学校では、毎日礼拝堂に行って、たいてい週一回生徒が話をする伝統があります。去年、私の授業を受けた高校三年生のある生徒は、時間の都合で話をする機会がなかった。それでも後輩たちに話をしたくなったのでしょうね。その生徒は、礼拝担当の先生に頼み込み、話をしました。礼拝の予定は狂いましたが、今から考えると自分で行動することはとてもよかった。社会人になった時、納得できない法律や事柄に、自分から動いて変えていくような行動力を養うことにもつながっていくと思います。

**馬場**　ROSEN先生は法学部でゼミを持っていらっしゃいますね。先生のゼミは、英語で進めていらっしゃるのでしょうか。

**ROSEN**　ゼミでは、今、日本の法律制度の改革という事柄を扱っていて、資料などの文章がほとんど日本語で書いてありますので、日本語で話していますが、一般的に英語の方が多いです。

**馬場**　先生がアメリカ人ということで積極的に参加している学生はいますか。

**ROSEN**　学生によって違いますね。

ただよく言われることですが、大学に入るまでの勉強に疲れ、大学は就職するまでの休憩時間という意識が日本の学生にはあるようです。サークルやクラブ活動やアルバイトをして、もし何もなければ、授業に出ようかなという学生が多い。学生の基本的な姿勢として、教室に来て座って教えてくれるのを待っている。外国人教員の役割は、そうさせないように刺激することです（笑）。

また、ゼミで、学生に意見を聞くとその学生は隣の人に聞く。隣の人がその人の意見を分かるわけでもないのに変ですね。日本人は、発言する前に自分の意見をチェックしたい。正しいか正しくないかを確かめたいのでしょうね。私としては、正しいかどうかはどちらでもいいので自分の意見を言って欲しい。それから大学の先生は、もう少し学生に勉強させて欲しいですね。同志社の学生は優秀だから、やればできるのに、日本の先生は甘いですね。日本の学生は集団としては優れています。私のゼミでは、毎年早稲田との合同ゼミをしていますが、スケジュール等は、学生に任せています。チームワークは抜群ですからだいたいうまくいきます。アメリカの学生の場合は、なかなか結論が出ないのですが。

**朱**　日本の学生と合宿するのは楽しいですね。

**ROSEN**　学生と先生の関係は、アメリカより日本の方がいいと思います。アメリカでは、基本的に学生と先生が離れている。ゼミ旅行も合宿もありません。

**松下**　アルゼンチンでは、大学の先生と学生の関係は、とても豊かだと思います。先生に授業で質問したり、議論したり、本を借りたり。ただ、それ以上のつきあいはありません。もちろんいっしょに旅行したりすることもありません。

日本で最初に教えた大学では、学生はいろいろ言われて、大人扱いされていませんでした。その点同志社は、細かいことは全然言いませんよね。学生の自己責任になっている。また、アルゼンチンの国立大学では、サッカー場や野球場、テニスコートなどの施設はありません。教室棟だけです。大学は勉強するところで、サークル活動はなく、趣味は学外で行いなさいという考え方です。しかし、高校時代にはよく遊びます。私は、高校時代に小説をよく読みましたね。

大学は入口が広く、出口が狭い。私の出身大学では一〇％しか卒業できないのが普通です。私の時は百五十人入学して十七人しか卒業できませんでした。大学時代は、本当に余裕がなく勉強ばかりしていましたね。

そして、アルゼンチンの国立大学は、よくも悪くも政治的ですね。一九一八年に大学が改革されて、ラテンアメリカ全体に改革運動が広がりました。改革ではなく革命だったんですが、三つの柱があります。一つは国立の幼稚園から大学までの教育費の無料化。最近も、図書館の使用料として二百円払うかどうかで大議論になった。貧しい移民の子でも大学まで行けて、大統領にもなれる。二つ目は、五年ごとに先生たちのテストがあります。全国の同じ分野の大学の先生が集まって、あるテーマについて講義する。よほど勉強しないと、若い先生から仕事を取られる危険性があります。日本では、一度先生になるとずっと教えることができるので驚きましたね。三つ目は、大学

授業での積極的な発言は、納得できない事柄・法律を自分から変えていくような行動力につながる（小川）

の評議会では、先生の代表と卒業生代表と学生代表を選挙によって選出します。国会の選挙と変わらなくて、政治政党とつながりがあります。学生たちは、社会・政治について毎日のように議論している。医学部や法学部など学部によって政治色が違う。アルゼンチンと比べて、日本の学生は、政治の問題にあまり興味がないようです。自分たちには責任がないと考えている。だから意見を聞いてもあまり意見が返ってこない。どこか寂しい気がします。

また、同志社の学生は、興味があることだったら一生懸命勉強しますが、語学の勉強に関しては大半の学生が何かを選択しなくてはいけないので、しかたなく勉強している感じがします。こう考えていくと学生が積極的でないのは、日本社会のシステムに問題があるのでは、と感じますね。

**ROSEN**　今までの日本の教育は、正しいか正しくないかの二つの選択肢しかなかったと思います。アメリカのある法律家の言葉に〝正しくない答えは、時々正しい答えより役に立つ〟というのがあります。正しくない場合は、それが分かった地点に立ってもう一度考え直せばいい。初めに正しい答えがあったら、考える必要などないですからね。

**松下**　日本人は、完全主義者ですよね。言葉もそうです。文法的に正しく表現できるときは発言しますが、自信がないと黙ってしまう。学生にいつも「間違ってもいいから何か言いなさい」と言っています。

**朱**　授業でも発言しないですよね。授業で質問を求めても黙ってしまう。

**松下**　後でそっと来る（笑）。

**馬場**　ROSEN先生のゼミではディスカッションは成り立ちますか。

**ROSEN**　開講して一カ月くらいは、成り立ちませんね。学生が慣れてきて少し後押しするとできるようになります。

**朱**　同志社の学生は素質はいいのですが、ハングリー精神がない。日本の学生が、外国語を勉強しようと思ったら、いくらでも方法があります。外国人は多いし外国映画を見ることもできるのに、意外とそういう機会を活用しない。

私が学生だった頃は、外国の情報がほとんど無かった。一番印象に残っているのは、一九七二年ニクソンが上海を訪れた時のこと。普段は十二時くらいに帰れるところが、その日だけはニクソンの市内見学が終わるまで家に帰らせてくれなかった。午後一時まで学校に閉じ込められていた。それくらい外国との接触がなかったのです。

大学生の時に、日本から外務省派遣の留学生が中国語の勉強に来ました。たった一人の留学生で、もの珍しさも手伝って、私たちは彼を捕まえては、日本語で会話しようとした。その彼は、私が日本に来た最初のころは、テレビでよく見かけていたので、外務省できっと出世したのだと思います(笑)。日本の学生は、そういった部分がない。私のような外国人の先生がいても、日本人の先生と同じようにしか受け止めていないようです。

**松下**　同志社から、チリやアルゼンチンに行った学生の話を聞くと、日本の事はあまり聞かれなかったそうです。そういう国もあります。私は、「アルゼンチンの生活のことを聞かせてください」「先生の家に遊びに行きたい」「アルゼンチン料理は、どんな料理なの」と学生から聞かれます。

ところで、二年前、日本とアルゼンチンのサッカーの試合は悲劇でしたよね(一同笑)。私は、京都と名古屋に住んでおり両方を行き来しているわけですが、二十三人の学生が、バスでわが家に来て一緒にサッカーの試合を見たんですよ。彼らはとっても積極的だし、行動的です。どの国と比べるかで日本の学生観も変わってくると思います。

**朱**　日本人学生は、〝なぜ?〟という疑問をあまりにも持ちませんね。もっと質問して、なぜそうなのかということを考えるべきです。これはアメリカでの話ですが、スタンフォード大学の学生にレポートを書かせて、〝A〟とか〝A-〟などかなりいい成績を付けました。すると学生から「なぜ、Aをくれるんですか、どこを評価してくれたんですか」と聞かれました。日本人の学生なら喜ぶだけでしょう。同志社の学生にもアメリカの学生のように〝なぜ?〟と思う姿勢と、それを積極的にぶつける姿勢を持ってほしいと思います。

外国人教員の役割は、座っているだけの学生を刺激すること（ROSEN）

## 日本の教育への提案

**馬場**　日本、あるいは同志社の学生が自分の意見を言わない、消極的であるということは、長年指摘され続けています。どうしたら積極的に話せるようになるのか、また日本の教育制度のどこに欠陥があるのか、皆さんのご意見を伺ってみたいと思います。

**松下**　やはり大学生になってからではなく、高校までの教育で身に付けておくべきです。アルゼンチンでは、小学校五、六年生の歴史の授業で、先生はほとんど説明しません。本を読んで、自分で研究をします。そして、先生が生徒の名前を呼び、呼ばれた生

徒は、みんなの前に立って、どういうふうに理解したか意見を述べます。すると十歳の生徒たちが手を上げて、今の発言について意見を言う。小さい頃から自分の意見を言う習慣が培われているのですね。私にも中学生の子供がいますが、日本の授業を見てみると、本当に教科書通りの授業をやっている。大学に入る前に人前で話す練習が必要であり、自分が理解したことを他人に伝えて相手を納得させるコミュニケーション能力を学んでいくことが必要です。

**小川**　日本の学生は、先生から言われたことしかしない。そういう人を育てていくならこのままの教育でいいのですが、自主的に行動できる人を育てたいなら、今の教育を変えていく必要があります。

**松下**　個性のある人を育てなさいと言われても、日本の企業を見る限り、個性のある人間がどこまで評価されているか疑問ですね。良いか悪いかは別にして個性のある人間は、今の日本の社会には合っていないかもしれません。能動的な人を育てたいのなら、小さい頃からのトレーニングが必要です。しかし、現実は一クラスの人数が多過ぎて、先生もそのような状態の中では、生徒が静かな方が楽なのです。生徒の個性を育てられる環境は十人から十五人くらい。以前、十八人の授業で学生たちにアルゼンチン元大統領婦人の生涯を描いたアルゼンチン映画「エバ・ペロン・エビータの真実」を生徒に見せました。その後ディベートをしましたが、男性も女性も積極的に発言してくれた。映画によって刺激を受けたこともありますが、人数も大いに関係がありますね。

学生が積極的でないのは、日本の社会システムに問題があるのでは？（松下）

**小川**　私の授業は、二十人から三十五人くらいです。少人数で積極的に発言できる雰囲気があります。他の学校では、四十人から五十人いましたので、英語の授業では、会話の練習すらあまりできなかったですね。少人数にすることで、先生も学生もコミュニケーションを図りやすくなる。

**馬場**　ROSEN先生は、日本の先生が学生に対して成績評価が甘く、学生を勉強させるような体制が、できていないと先程おっしゃっていましたね。

**ROSEN**　日本の先生は、忙しすぎると思いますね。一つの問題は、やはり人数に関係がある。大勢の人数の授業を持っていますが、舞台に上がった俳優のように授業をすることになります。私には、無理です。大勢の学生に向かって授業をすることは、一方的で大雑把になりがちです。少人数では、お互いに考えることができます。そうした環境下で先生は、学生から抵抗があっても勉強させるべき

同志社の学生は、素質はいいのにハングリー精神がない。たくさんの機会を活用してほしい（朱）

です。その方が、学生も深く勉強でき、達成感があって嬉しいのではないのでしょうか。

**馬場**　国際中学校・高等学校には、日本の小学校だけで教育を受けてきた生徒もいますね。帰国生徒とお互いに影響を与え合っていますか。

**小川**　今年は、高校一年生の一般英語を担当しているのですが、ずっと日本で生活してきた一般の生徒と英語以外の言語圏で生活してきた帰国生徒がいます。積極的な帰国生徒がいることで、間違ってもいいから活発に発言する雰囲気があります。

**ROSEN**　留学生を見ると、留学前と比べて、かなり変わって帰ってくる。遺伝子の問題ではない(笑)。日本人を魚に例えると、今までと違う湖で泳ぐことになっても、その環境に合わせてちゃんと泳げるのです。

**朱**　さまざまな帰国生がいると学生同士で刺激し合うことになっていい。私は、よく学生に「夏休みの間に海外に行きなさい」と言っています。いろいろな国を体験したほうがいいですね。

**松下**　帰国生や留学生が、クラスに一人か二人いると雰囲気が良くなる。それとクラスの少人数制が必要です。

**馬場**　一人一人の顔と名前がはっきり見えているということでしょうね。

**松下**　最近の授業で、若いスペイン人が、何を考え望んでいるかが書かれた記事を紹介しました。学生に同じ質問をしたところ、返ってきた意見はスペイン人と同じで、やはりパーソナリティを大人社会に認めて欲しいということでした。四十人、五十人のクラスでは、全員のパーソナリティを把握できない。やはり、クラスの少人数化はとても重要です。

**小川**　私は、センター試験を無くしてほしい。学生は、大学受験のために勉強することになっている。国際中学校・高等学校では、ほとんどセンター試験を受ける人はいませんから、幅のある授業をすることができます。他校ではどうしても英会話より、文法的な方に重点が置かれる。受験に役立つ勉強が、優先されてしまうのです。

**馬場**　英会話ができないのは、大学受験だけが原因ではないように思います。日本人の外国語の勉強の仕方というのは、今まで文法を柱に勉強してきた。学生も先生も文法という寄りかかる柱が必要だったのです。

**小川**　私は会話から日本語を覚えました。

**馬場**　私は、ドイツ語を教えていますが、学生のほとんどがゼロからのスタートな

間違ってもいいから個性的な主張のできる学生を育てたい（馬場）

ないことに通底するものがある。間違うことをすごく恐れている。間違ってもいいから、個性的な主張ができるような学生を、同志社の中で育てたいといつも思います。

**ROSEN**　文法が分からなければ、話せないという話はものすごく意味が深い。言葉に限らずルールがなければ、日本人は何もできないように思います。日本社会全体が、ルールがなければ何もできないのかもしれませんね。

**馬場**　日本文化の場合、ルールというのが大きな特徴だと思います。ルールを変えていってこそ社会に活気が出てくる。いつも同じルールでは、静かだが随分退屈な社会ではないでしょうか。ルールには、必要なら変えてくダイナミズムが必要ですが、残念ながら今の日本社会には見出せませんね。

**ROSEN**　誰かが、新しくつくらなくてはいけない。

**松下**　日本人は、上手にルールをつくりますね。アルゼンチンタンゴの踊りのステップを解説した本を、日本人が出版したのです。読んでみると、踊れるはずなのに、初めて見るステップがあったりして難しく、本のとおりにタンゴを練習しても踊れない。日本人はルールをつくってそれに従って完璧にしようとする。柔軟性がないですね。

**ROSEN**　アジアの映画についての記事を読んだことがあるのですが、香港人、中国人、韓国人、日本人が集まって一つの映画をつくった時の記事です。監督は、「日本人のクルーは、最初に細部のスケジュール、方法まで知りたがる。自分でやりながら決めなさいと言うのですが、日本人は必ず初めに何でも決めようとします」と言っていました。

**朱**　確かにルールがあると効率良く仕事ができます。日本人は誰かが、ルールをつくってくれるといい仕事をする。

**ROSEN**　同じアジアでも日本と中国は違いますよね。

**朱**　中国人はもっと能動的に行動します。

**馬場**　私はドイツで在外研究をしていたので、まずは簡単な会話から始めます。しかし、学生の大半から「先生、文法を教えてください」という声が上がる。やはり文法から入るのがいちばん安全なんですね。

**松下**　私もスペイン語の授業をゼロから始めるわけですが、会話から始めると、生徒は最初は不安ですが、すぐに使えるようになる。すごく楽しくなるんですが、やはり文法も大切なんでしょうね。

**馬場**　日本人が人前で意見を言わないことは、文法が分からないから話そうとし

ことがあって、フランクフルト大学で、社会学者のハーバーマスのゼミに出ていたんです。そこには中国人、韓国人、日本人などアジアの留学生が随分いました。中国からのある留学生は、フンボルト財団の奨学金でドイツに来ていたのですが、いつも授業の一番前の席に座り、ディスカッションが始まるとドイツ人と同じように手をあげて発言する。私は、後部座席の方でみんなが何を発言するのか聞いていた（笑）。

**朱**　中国人は、アメリカ人と似たようなところがあって、中国人が集まるとろくなことが無い（笑）。すぐにけんかが始まる。福建省の知事はかつてこんな名言を言った。福建省の中国語の略称は〝門〟の中に〝虫〟で「閩」と書きますが、「福建の人は福建にいると門の中にいる虫のようにたいしたことがないが、福建を出ると、ドラゴンになって活躍する」と。中国人が外国に出て、集団から開放されると自由活発になります。今、日本人が苦しんでいる点は、戦後のルールが壊れて新しいルールを必要としていること。今、新ルールをつくろうとしているから、苦しい。以前はアメリカのものを取り入れれば良かったが、今は取り入れるものがない状態です。現首相の小泉さんか誰かが、新ルールをつくれば、良くなるのではないでしょうか（笑）。

## 国際的な同志社であり続けるために

**馬場**　同志社には現在、いろいろな国際交流の可能性があります。例えば、大学の学生レベルではサマープログラムや交換留学によって海外で学ぶことができ、またＡＫＰやテュービンゲン大学同志社日本語センターなどの存在によって、キャンパスでも留学生との交流が可能です。教員レベルでも様々な制度があります。初めに申しあげたように専任外国人教員は、同志社全体で三十三人を数えます。こうした現状を踏まえ、さらに充実をはかるために、どのように国際化を展開していけばいいとお考えでしょうか。

**ＲＯＳＥＮ**　化学や物理などさまざまなジャンルの専門知識を持つ外国人の先生が、もっと増えてほしいですね。今でも同志社は、他大学、特に国立大学と比べたらずっといいですね。同志社が他大学をリードして、次のステップとして、さまざまなジャンルの外国人の先生を増やしていくべきです。そこで問題になって

くるのが日本語です。

**馬場**　英語や他の外国語での授業も開いていくということですね。

**松下**　おっしゃるように、英語での講義を増やすことが必要です。

**朱**　何人かのアメリカ人の先生が、英語でゼミをしている。

**松下**　留学生のためにも英語の講義ももっと増やすべきです。

**朱**　留学生が増えれば、もっと一般学生とお互いに刺激し合っていけます。

**小川**　英語は、アメリカ英語ばかりではなく、オーストラリア、イギリス、シンガポール英語などいろいろな発音があります。

**馬場**　そうですね。だから、次のステップとしては、留学生も先生もいろいろな国から来て、他の言語の講義も普通に聞けるような垣根の低い大学というのが、同志社のめざすところですね。

　最後に同志社について一言ずつお願いします。

**小川**　同志社に初めて来た時、クラーク記念館や赤レンガの建物を見て、私の故郷のエバンストンにある建物に似ていて、懐かしさが込み上げてきたことを覚えています。国際的な同志社の環境が、もっと洗練されることを望んでいます。また、同志社では私たち外国人教員が、日本人の教員と全く同じ扱いです。これは、ほんとうに素晴らしいことです。

**朱**　同志社に来て四年目ですが、同志社独特の匂いがある。それが何なのかまだよく分かりませんが。ただ平等の精神が、大きく関係していると感じています。教師、学生ともに恵まれていますね。

**松下**　同志社に最初に来た時、言葉だけ教えるということになるのではないかと心配でした。ラテンアメリカの多くの誤解を解きたかった。それでラテンアメリカの国との交換留学の話を国際センター所長に持っていくと、プロジェクトをスピーディーに進めてくれた。恵まれていると思います。私は比較文化の授業をもっています。日本人学生、アルゼンチン学生、メキシコ学生、アメリカ学生が一緒になってディベートをする。私は、いつもこの国の文化の香りの高いところをもっともっと国際的に紹介していったほうがいいと思っています。同志社は、京都の伝統の香りを持ちながら、もっと国際社会に対してオープンであってほしいですね。

**ROSEN**　同志社の素晴らしい点は、バランスですね。私は、大学に来た時に新島襄の事を全く知りませんでしたが、新島襄自身が持っていた日本の伝統と海外と将来に対してのバランス感覚がものすごくよかった。そのことが、今の同志社の姿につながっている。世界中から多様な人が集まり、これからもっと国際化していくことを望んでいます。

**朱**　考えてみれば、新島襄も帰国生ですよね。海外を経験してきているということで、同志社設立にきっと大きな影響を与えているでしょうね。

**馬場**　本日は、経験豊かなお話をたくさんお聞かせいただき、また同志社の将来に対する貴重なご意見をちょうだいすることもでき、感謝しております。本当にありがとうございました。

**（二〇〇一年六月一九日大学ハリス理化学館にて収録）**